

SIA (Soaked in Asia) マレーシア編と上海編に寄せて

高樹, のぶ子
九州大学アジア総合政策センター特任教授

<https://doi.org/10.15017/14086>

出版情報：九州大学アジア総合政策センター紀要. 3, pp.185-186, 2009-03-31. Kyushu University Asia Center
バージョン：
権利関係：



SIA (Soaked in Asia) マレーシア編と上海編に寄せて

高樹 のぶ子

(九州大学アジア総合政策センター・特任教授)

混ざり合うが溶け合わず = マレーシア SIA

マレーシアの歴史は公式には1400年ごろのマラッカ王国から始まっている。その後の植民地支配を書けば、それだけで何ページも必要だ。イギリスの植民地時代にインドから（南部のタミル人）安価な労働者として流入があり、また、中国からも大量移住があった。植民地時代の経済は、ゴムと錫に支えられていた。ゴム農園の労働者はインドから、錫鉱山の労働者は中国から移住してきて、非マレー社会が形成された。今現在のおおまかな人口比率を言えば、元からいたマレー人が50%、中国人が30%、インド人が8%その他ということになる。マレー人優遇政策がとられ、その政策は、中国人やインド人を、逆に圧迫している、というのが、現状だ。

こうした配分の民族だが、マレー人はイスラム教、中国人は中国仏教、インド人はヒンドウ教と画然と別れているし、教育システムも小学校から大学まで、ほぼ縦割りになっている。公的な初期教育は公平をうたっているが、実際にはマレー人化が進められていて、本音は「イスラム教徒で、マレー語を話す国民」を増やしたいのが解っているので、中国人たちは、独自の教育を中国語で行っている。

マレー人はマレー語を話しイスラムを信じる、中国人は中国語で中国寺に参る、インド人は英語を喋り、ヒンドウ寺院でお互いの絆を確かめる。こんな中での文学も、それぞれの言語で発信され、日本の文部科学省にあたる組織が出す文学賞は、当然のことながらマレー文学が有利になる。

中国人組織は経済力を持っているので、教育も出版もまた、文学賞も、中国語社会の中で成立している。とはいえ、30%の人口なので、出

版も作家活動も限られていて、国内に向けての展開の可能性がない分、海外、とりわけ台湾での出版や評価に期待が集まる。それは中国本土ではなく、台湾なのである

今回とりあげた李天葆さんもその一人で、台湾での出版をととても喜んでいる。今現在の上海文化の隆盛とは、別の流れがあった。その作風は耽美的で、ノスタルジックだ。これは彼自身の生理によるものであると同時に、故国を離れた中国人にとって、故国はすでに別の国になり、へその緒は遠き20世紀前半の、上海に繋がっているからだと感じられる。

彼は李香蘭に憧れる。三島由紀夫や谷崎潤一郎の美に心酔する。今を生きるにはマレー社会は息苦しく、かつての故国は色を変え、ひたすら白黒写真に写された美しい女性たちに、ため息をついて生きている。彼の美意識には切ないものがある。取り上げた作品は写真がテーマになっているので私も写真をテーマに短編を書いた。

(新潮第104巻第10号より転載)

強くて悲しい女たち = 上海 SIA

ついにサイアも五回目にして中国に上陸。

高度成長のまっただ中にある上海を訪問して、いまもっとも注目を浴びている女流作家潘向黎^{（パンファンリ）}さんと対談した。

彼女とは以前、東京と上海で会っている。相変わらず美しく可愛い。背が高い。凛とした強さのある人。

今回翻訳紹介する「謝秋娘よ、いつまでも」は、美しく冷たい女が主人公だ。レストランのオーナーとして冷徹に成功を収めるが、女としての大事な部分を失っている。その部分に關す

る対談は、熱を帯びた。潘さんも私もこの短編の主人公も女性なので、お互いに鋭く伝わるものがあった。

主人公の謝秋娘は、急激な変貌をとげつつある今の上海の、どこにでもいそうな女性だ。かつて社会の激しい転変に見舞われ、旧来からの価値観を無くして、氷のように冷たい柱を心に突き立てて生きるしかない女に、私も作者も、ある種の哀れみを覚えていたし、その哀れさを私が理解したことを、潘さんは喜んでくれた。私にとっては半世紀前に、母の身に起きたことだ。敗戦で生きる基盤が壊れた経験は、一世代の遅れでいま、上海の女たちをおそっているらしい。

失われた価値観に代わるものが何かを、探しあぐねている上海の女性たちは、お金と人脈と才覚で生き抜こうとする。柔らかい心を隠して、冷たい光を放ちながら、時代に負けまいと必死だ。

潘さんが造形した女性は、今の上海そのものかも知れない。

何十階もの高層ビルが立ち上がる隙間に、フランス租界時代の古いアパート石庫門が身をかがめて、暗がりに耐えている。住人の多くは老人達だ。誰もが必死だ。しかし高いビルはより高く、暗がりはさらに暗さを重ねていく。その明暗は、旅人を幻惑する。胸騒ぎをもたらす。私の短編は、そのめまいから生まれた。

上海の常住人口は1800万人を越えるそうだ。その非常に多くが地方出身者でもある。高みに向かってひた走る喜びの一方で、高度成長から取り残される悲しみも大きく深い。

経済が沸き立つ割にはまだ文芸の成熟が十分でないのは、関心が日々変わりゆく生活に向けられていて another world に遊ぶ余裕が無い、というより、日々の訪れが another world なのかも知れない。初版は長編が1万部、短編が5千部、ベストセラーで10万部という数字は、そんなに悪くはない。

潘さんは私が訪問する直前に、短編中編に与えられる中国最高の賞、魯迅文学賞を受けられた。

(新潮第105巻第4号より転載)